



平成28年度 地(知)の拠点整備事業
活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成

熊本大学COC事業 —事業報告書—



はじめに

熊本大学では、熊本県内の多様な地域課題解決に貢献するため社会貢献を柱として、全県域への拠点活動や、まちづくり産業振興、地域医療の支援などに取り組んでいます。平成 26 年度から、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択されたことにより、学長をトップとした地域創生推進機構を設置。地域で学び、想像力をもって地域の課題解決に挑戦し、世界規模で社会に貢献する“熊大スピリット”にあふれた人材の育成を目指し、「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成事業」を推進・展開しているところです。

平成 28 年 4 月に発生した、熊本地震では県内様々な地域で多くの被害が出ました。本学も黒髪キャンパス工学部 1 号館の崩壊や五高記念館の煙突崩壊など多数の建物、備品が損害を受けました。

熊本大学は地元の国立大学として、これまでの研究成果を地域復興に活かせないかと考え、研究者の熊本復興への想いと地域とともに発展を遂げてきた本学の使命として、「熊本復興支援プロジェクト」を設置しました。

自治体等の地域の声をもとに研究者の発意による復興プロジェクトチームを再編成し、復興プロジェクトチームを結成。地域創生推進室は「復興ボランティア活動支援プロジェクト」の窓口として、災害復興の各ステージに応じ、学生ボランティアの協働や大学の知的資源、専門性を活かしたコミュニティ支援を実施しました。

熊本地震発生以降は、震災復興が主の活動となりましたが、これからも本学教職員・学生一同、地域の皆様、関係自治体や企業、団体の皆様と連携しながら、復興支援も含めた地域貢献活動に取り組んでまいりますので、何卒、ご協力とご支援のほどよろしくお願い致します。



熊本大学
地域創生推進機構長
原田 信志

もくじ

1. 事業概要と目的・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2. 平成28年度取り組み一覧・・・・・・・・	2
3. 教育プログラム	
(1) カリキュラムの開発状況・・・・・・・・	3
(2) 地域課題解決プログラム修了者・・・・・・・・	5
(3) STEP3 PBL科目の実施状況・・・・・・・・	6
4. サイエンスショップ型研究・・・・・・・・	11
5. 平成28年熊本地震復興支援・・・・・・・・	16
6. 熊本県立大学との共同事業・・・・・・・・	31
7. 社会人の学び直し、eラーニングを活用した生涯学習・・・・・・・・	33
8. 平成29年度の取り組みに向けて・・・・・・・・	35
9. その他の資料・・・・・・・・・・・・・・・・	36

1. 事業概要と目的

熊本大学では、市民、企業、行政などと協力して、地域課題を解決する人材育成を進め、熊本県やこれまでに包括連携協定を締結した市町村、企業等との取り組み実績を生かした、熊本地域の地方創生推進拠点（Center of Community）として、「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成」拠点の形成に全学で取り組んでいる（図1）。人材育成のフィールドとしては、熊本県全域を対象とした地域課題別に4つの地域（熊本都市圏、県南地域、県北地域、天草地域）を拠点化し、教育研究の場としてだけでなく、社会貢献の場として広く活動を展開してきた。

また、平成28年4月14日に発生した熊本地震以降、各被災地ではボランティアを受け入れ地域の復旧・復興が行われている。本学でも、平成28年6月に学長を総括リーダーとする「熊本復興支援プロジェクト」が設置された。本COC事業では、「復興ボランティア活動支援プロジェクト」を担当し、本学学生が被災地域でボランティア活動を行う際の支援や、各被災自治体の支援ニーズの収集および教員や学生とのマッチングを進めてきた（図2）。平成29年度も引き続き「復興ボランティア活動支援プロジェクト」の機能を残し、被災地でのボランティア活動支援を継続する。

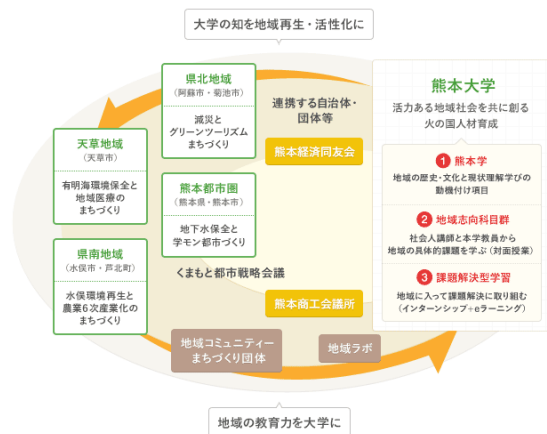


図1 火の国人材育成事業の展開図

被災地復興支援（取組状況）

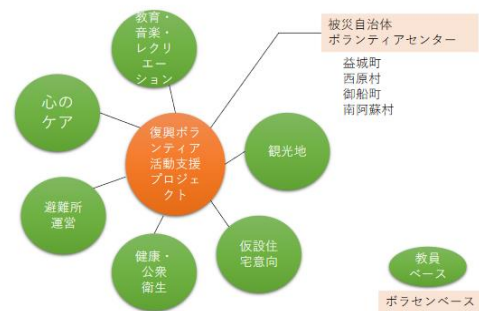


図2 被災地復興支援取組状況

2. 平成28年度 取り組み一覧

平成28年度に掲げた教育・研究・社会貢献テーマについて、下記の通り実施した。

教 育

4～7月	肥後熊本学の試行
通 年	地域志向科目群の設置
通 年	選択科目・平成26.・27年度に開発したPBL科目の本格実施
通 年	地域志向・課題解決型科目の新規開発及び教育内容の充実
4 月	学生授業アンケートの実施・検証
通 年	地域志向教育研究（教育）の実施

研 究

4 月	COC研究の進捗状況の検証
4 月	火の国人材育成のカリキュラム開発研究の検証
通 年	サイエンスショップ型研究の実施
11月	COC研究フォーラムの開催

社会貢献

通 年	社会人の学び直しのための教育コンテンツの在り方検討
通 年	コミュニティに対する地域課題解決への知的支援の実施
通 年	持続可能コミュニティの在り方検討
通 年	地域でのCOC成果報告会
通 年	地域ラボでの学習会

全 体

5～11月	地域創生推進機構連携協議会の開催
5 月	地域創生推進機構外部有識者評価委員会の開催
12月	事業中間評価
1 月	中間評価と成果の発表
1 月	中間評価結果を踏まえた教育・研究・社会貢献事業の改革方針

3. 教育プログラム

(1) カリキュラムの開発状況

COC の教育プログラムでは、熊本において教育・フィールドワークを実施することで、地域の課題を理解し、課題解決に向けた基礎的素養を身につけ、地域社会に貢献できる人材を育成することを目的としている。

地域志向の教育を充実させるため、熊本を舞台に学べる基礎科目、応用科目を『地域課題解決プログラム』として展開している。このプログラムは、地域の学びへの導入科目として「肥後熊本学」と、地域の科目を具体的に学ぶ「地域志向科目群」、そして課題解決型学習（PBL）の3つのSTEP（図3）で構成されており、この積み重ねにより、専門課程の基礎となる課題解決能力を培うことができる。

表1 教育開発の目標達成状況

目標	H28年度目標	H28年度達成状況	最終年度の目標
地域志向の教養教育科目「肥後熊本学」の導入	試行的に選択科目として導入	選択科目として4クラス実施	全学士課程新入生
地域志向科目群の導入	28 科目	34 科目	35 科 1 年次生 +その他年次履修者
課題解決型学習（PBL等）	3 科目	3 科目	5 コンテンツ開発

STEP1 に該当する科目（表2）から 1 単位、STEP2 に該当する科目（表3）から 4 単位、STEP3 に該当する科目（表4）から 2 単位の、合計 7 単位以上を取得した学生には、「地域課題解決教育プログラム修了証」が発行される。



図3 COC 事業における教育のステップ

表2 STEP1 肥後熊本学の開講科目と履修者数

カテゴリ	授業テーマ	単位数	履修者数
肥後熊本学	「熊本の希少動物」と「肥後伝統の植物」	1	23
	「熊本の保健医療福祉」と「こうのとりのゆりかご」	1	64
	「歴史文化」	1	73
	「自然災害リスクと持続可能なまちづくり」	1	150

表3 STEP2 地域志向科目群

カテゴリ	授業テーマ	単位数	履修者数
地域のまちづくりについて学び・考える	地域づくりの社会学	2	203
	環境保全と地域づくり	2	165
	都市まちづくり学入門	2	48
	減災リテラシー入門	2	142
	減災型地域社会づくり	2	103
	市民参加とまちづくり	2	160
	実践から学ぶまちづくり	2	116
	社会参加とはどのようなことか	2	53
	認知症になっても安心して暮らせるまちづくり入門	2	45
地域の歴史・文化について学び・考える	熊本の伝説を探る	2	164
	五高と近代日本	2	104
	地域の言葉	2	不開講
	文学の森 熊本の文学	2	72
	日本建築を歴史的にみる	2	93
	ヨーロッパの都市と建築	2	29
	芸術文化考	2	156
	多文化共生と日本語	1	124
自然環境と地域の暮らしについて学び・考える	家庭・地域の教育力を問う	1	96
	実験で知る青い惑星 1	1	1
	実験で知る青い惑星 2	1	1
	惑星地球の水循環	2	221
	くらしと環境	2	11
	家庭・地域の教育力を問う	1	96
	実験で知る青い惑星 1	1	1
	日本の経済地理	2	171
	火山を究める	2	100
地域問題と事例から社会や技術について学び・考える	熊日 新聞制作講座	2	58
	女性と職業	2	184
	インターネットの発展と人間社会	2	54
	現代社会と地域医療—医療現場からのメッセージ	2	93
	生活に関わる環境・資源・地域力	2	73
	企業から学ぶ情報通信技術（ICT）	2	52
	ジャーナリズム論1・九州グローバル化の課題	2	89
	ジャーナリズム論2・地球環境と水俣病	2	96
	人権と性を考える	1	49

表4 STEP3 PBL（課題解決学習）の開講科目と履修登録者数

授業テーマ	単位数	履修者数
地域デザイン論	1	39
人々の暮らしから学ぶ地域の課題解決	2	7
災害支援実践	1 or 2	71
水俣地域インターンシップ・フィールドワーク学習 / 対立・葛藤解決コミュニケーションワークショップ	2	0

地域課題解決プログラムでは、専用のウェブフォームを設け、プログラムへの参加を学生に呼びかけた。平成28年度は、57名の学生からの登録があった（表5）。57名のうち、24名はCOC+のプログラムにも登録している。

表5 平成28年度地域課題解決プログラム（COCプログラム）認定登録状況

学 部	文学部	教育学部	法学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	合 計
人 数	11	10	14	1	1	1	19	57

（2）地域課題解決プログラム修了者

また、平成29年3月10日（金）には初めてのプログラム修了者を輩出した。地域課題解決プログラム修了証授与式は、COC/COC+シンポジウム「熊本地震からの復興と教育プログラム」の中で行い、江村和大さん（法学部1年）、緒方李華さん（法学部1年）、川俣亜佑美さん（教育学部2年）、野口真未（法学部2年）の計4名の学生にプログラム修了証を授与した。

修了した学生からは、フィールドワークでの体験が、地域の課題に取り組むことの難しさと魅力を感じたというコメントが寄せられた。



第1回プログラム修了者

（左から、江村さん、原田学長、野口さん、川俣さん、松本理事、緒方さん）

【修了者からのコメント】

- ・今回、COC コースを受講し、特に天草でのフィールドワークで学んだことがとても大きかったと思います。実際に住民の方にお話を聞くことで、気づくことが多かったです。今後は、もっと地域志向の講義を受講して、学びを深めていきたいです。COC+にも参加したい。
- ・将来は地方自治体に就職したいと思っているので、今回、現地を見て学んだことが活かされていくと思います。
- ・グループ間の疑問を話し合ったり、どうしたら分かってもらえるかを考えて工夫したりする能力が身についたと思います。これは、将来とても役立つ力になるのではないのでしょうか。本当に受講してよかったと思います。
- ・フィールドワークの講義では、地域の方とのコミュニケーションを通して、私が予想していなかった多くの情報を収集することができ、現地に足を運ぶことの大切さを痛感しました。フィールドワークに参加したことで、課題を解決するためには、現地の実態をよく把握し、いろいろな視点から、対策を考えることの大切さを学ぶことができました。

インタビュー記事の詳細はこちら

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/kouhoushi/kumadainow/people/p170330>

（３）STEP3 PBL 科目の実施状況

STEP3では、実際に熊本地域が抱える課題に対する解決策を提案するプロジェクト型の教育（PBL: Problem Based Learning, Project Based Learning）を導入している。講義形式の知識習得はeラーニングで行い、授業時間はフィールドワークとディスカッションなどのアウトプット中心型の授業を行うことで、学生の主体的な課題解決能力の育成に取り組んでいる。平成28年度は、「地域デザイン論」「人々の暮らしから学ぶ地域の課題解決」「災害支援実践」の3科目を開講した。

地域デザイン論

開講曜日：第3ターム 金曜3限

担当教員：本間 里見、内山 忠、天野 慧

授業のフィールド：湯前町

授業の概要：

実際の中山間地に赴き、地域課題に取り組む合宿形式のワークショップ（2日間）と教室における講義を組合せた地域志向型科目。地域をフィールドにして自ら地域の課題を発見し、デザイン思考により住民と協働して課題解決するプロセスを通して、地域活性化に資する思考力、創造力、表現力、コミュニケーション力を修得する。

学生が取り組んだテーマ：

- 駅前活性化のためのイベントを企画する
- 湯前駅のレールウィング（プラットフォーム広場）を活用して、地域活性化のためのイベントを企画する。住民から意見を聞きながら、グループで案を完成させ、住民に対してプレゼンテーションを行う。

学生が提案した内容の一例：

- 球磨焼酎のボトルラベル作り
- 子供が職場体験を行うことができるカフェの設置
- 駅前広場への足湯施設の設置
- サイクリングしやすい駅前づくり 等



iPad を活用した学生の発表の様子



湯前町の方も参加したワークショップの様子

学生の反応：

授業実施後に、アンケートを実施した。「今後、卒論やゼミへ取り組む際のヒントをつかめた」「このような授業を今後も続けて欲しい」「友達や後輩にすすめたい」といった設問項目に対し、いずれの設問についても、約 80%以上の学生が肯定的な回答を行ったため、授業に対する満足度が高かったことが確認できた。

また、アンケートの自由記述では、「自分が大学に来て一番やりたかった授業だったので、参加できて非常に良かったです。講義室に閉じこもった授業ではなく、外に出て活動できた点がよかった」「実際に現地に行くことで、現地の魅力を感じることができた。それにより、湯前町の魅力をみんなに知らせたいという気持ちを持てた」といったように、フィールドに出ることが学生の意欲の喚起につながったことが読み取れた。

<アンケート結果>

今後、卒論やゼミへ取り組む際のヒントをつかめた(N=39)

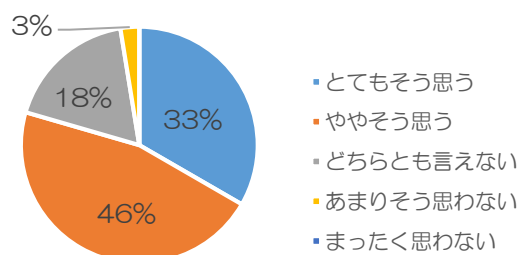


図 7 授業のお役立ち度

このような授業を今後も続けてほしい(N=39)

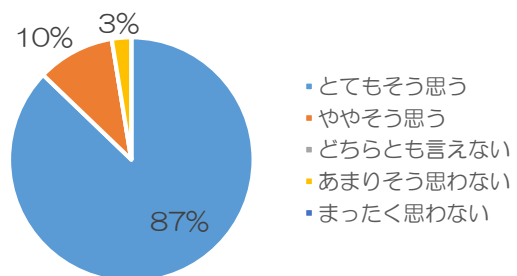


図 8 授業の満足度①

人々の暮らしから学ぶ課題解決

開講曜日：前期 月曜 4 限

担当教員：河村 洋子、天野 慧

授業のフィールド：天草市

授業の概要：

本科目の受講生は2つの課題に取り組む。一つ目は、天草市の保健分野の政策的な課題に焦点を当て、その課題の解決策を導くために課題の構造を把握し、課題に関連する人々の「行動」を紐解くことである。これは、地域住民と直接接しながら活動する行政保健師による講義やフィールドワークを通じて、天草市の抱える健康施策の課題を明確にする。二つ目の課題は、明確になった「行動」に関連する課題に対して解決策を導き出すことである。保健師および地域住民も含め聴衆に対してプレゼンテーションを行う。

学生が提案した内容：

- 若者への健康キラキラプロジェクト
天草市の長期的な健康増進施策を推進するために、高校生が健康に対する意識を向上させる広告や、高校生が家庭でのお弁当作りを手伝う「弁当の日」企画などを提案
- 家族で健康な生活へ！！プロジェクト
家族に焦点を当てて、天草市の件クオポイント事業の対象者拡大や、親子で取り組む料理教室の開催、健康イベントの案内を高校生に告知し、子供から親に伝えてもらう企画などを提案

学生からの反応：

最終レポートの記述では、「班員と協力して地域の課題について考える毎時間はとても充実していた。自ら発言し、考え、ゼミの主体となる授業は大学では少なく、貴重な機会に参加することができて嬉しかった。学んだこと、つけた力をここだけで終わらせず、またこのような講義を含め地域の課題について考える取り組みに積極的に参加したいと思う」といったように、地域の課題に対して学生が主体的に取り組むという授業方式に対して、肯定的な評価を得た。さらに、「この授業では自分の意見を相手に効果的に伝えるとともに、相手の意見を尊重し合うことが大切だと学んだ。私は 3 年生になると「ゼミ」があって話し合いの場が多くなってくる。そこで自分の意見を効果的に相手に伝えるようにすること、相手の意見を尊重して法学部のなかでいう私見などの考えをまとめていくことに生かしていきたい。また将来、公務員志望である。その仕事のなかで街の課題を解決しようとするとならゆる利害関係が生ずるので今回の課題解決で人と話し合い、ターゲティングして、様々な解決策を考えることができたことを糧に、うまく調整しながらの課題解決ができるようになりたい」というコメントのように、この授業の体験が学生の今後の活動につながったことを確認できた。



天草市での漁師へのインタビュー調査の様子



天草高校での高インタビュー調査の様子



e ラーニングを活用したプレゼンテーションの様子



天草市保健師による e ラーニングコンテンツ

災害支援実践

開講曜日：集中講義

担当教員：松瀬 憲司、安部 美和、天野 慧

授業のフィールド：熊本県内全域

授業の概要：

熊本地震の災害支援活動に参加した経験を共有し、伝えるための方法について考えることができるようになることを目指す。e ラーニングでの事前学習と各自のボランティア活動、活動報告会、e ラーニングでのレポート提出により構成される。

平成 28 年 10 月 16 日には、ボランティア活動報告会「熊本地震における大学生のまなざし」を開催し、被災地で活動する学生団体からの発表、それぞれの活動経験の共有、こうした地震の経験やボランティア活動の経験をどのように後輩に伝えていけるか、について参加者同士でディスカッションをおこなった。報告会には、宮崎大学から参加してくれた 13 名も含め 81 名の学生が参加した。

学生が取り組んだボランティアの一例：

- 避難所の運営支援
- 支援物資の仕分け作業

- 被災地域での子供たちの運動支援
- 仮設住宅での聞き取り
- 避難所移動支援
- 病院で働く職員の方々の子供を預かる学童保育支援 等

学生の提出したレポート：

この授業で課題として出されたテーマは、「今回の震災の経験をどのように後輩に伝えるのが効果的か」であった。ボランティア活動に参加した学生の多くから、ほかの学生がどのような活動を行っていたのかわからなかったため、こうした活動の記録を残したいという提案が出された。こうした声を受けて、承諾のとれた学生のレポートを冊子「震災復興に向けた大学生のまなざし」としてまとめ、刊行した。学内外の方が閲覧できるよう、COC のホームページ Hugkum からダウンロードが可能である (<http://coc.kumamoto-u.ac.jp/public/>)。



ボランティア報告会で活動の振り返り



冊子「震災復興に向けた大学生のまなざし」

（４）熊本大学COC/COC+合同シンポジウムの開催

平成29年3月10日（金）、熊本大学工学部百周年記念館においてCOC/COC+合同シンポジウム「熊本地震からの復興と教育プログラム」を開催した。本シンポジウムには、COC およびCOC+事業で連携を結んでいる自治体や民間企業、プログラムを履修する学生など111名が参加した。シンポジウムでは、岩手大学副学長の八代仁先生をお招きし、東日本大震災以降、岩手大学が実践する地域復興の教育開発の現状について講演いただいた。また、本学のCOC およびCOC+の活動紹介、農業の6次産業化による復興を目指す取り組みなどが紹介された。このシンポジウムにおいて、第1回地域課題解決プログラム修了証の授与式も開催した。

4. サンエンスショップ型研究

(1) ZERO PROJECT

連携自治体等：熊本市北部クリーンセンター

地域との連携：黒髪校区第4町内自治会

活動概要：

熊本市のクリーンセンターや大学周辺の自治会と協力し、大学周辺のごみ出しマナー向上に向けて学生たちの団体が活躍している。

3年前、大学周辺の自治会の一番の懸念はごみステーションのマナー違反の多さであった。曜日違いのごみ出し、分別のできていないごみの数々、いくら見回りをしても注意文を貼りだしてもなかなか改善しなかったごみ問題。何度も大学側とも交渉し、解決策を模索していた。こうした状況を解決するため、北部クリーンセンターの方々が仲立ちし、熊本大学文化祭実行委員会の「紫熊祭」の環境部がこの問題の先陣を切ることになり、自治会長たちと定期的に地域を歩き、ごみ出しルール違反のごみ分別のし直し、ごみ出しマナーの講習会の開催などに参加して実情を知ることとなった。実際に参加をした学生たちからは、これまでの自分のごみの出し方を見直したいというものや、友達を誘ってもう一回参加したい、もっと多くの人に知ってもらう必要があるといった感想が聞かれている。

こうした取り組みのおかげで、今では違反ごみは随分と減り、分別マナーもよくなってきた。今年の紫熊祭では、地域の方々から環境部のメンバーへの感謝状の贈呈もあった。自分たちの通う大学だからこそ、近隣の方々とどう付き合っていくのかを考えるという姿勢を作るきっかけにつながっている。

活動後の講習会では、ゴルフボールは、「燃やすごみ」か「埋め立てごみ」か？金属のスプーンやフォークは、「資源ごみ」か「埋め立てごみ」か？といった分別クイズも出題される。今年は留学生にも働きかけるため、活動動画の英語版も作成しており、紫熊祭の学生だけではなく、いろいろなサークルも巻き込みながら地域のごみ問題に目を向けられるきっかけを作ろうとしている。地域のごみ問題をめぐり、地域住民との関係回復を図るだけではなく、今では一緒に活動をする関係にまで発展している。



自治体の方が先生になって講習会



地域のごみ出し日の確認



ごみの分別の状況確認



確認された違反ごみ

(2) Project Keep Left

連携自治体等：熊本市中央区役所、熊本北警察署

地域との連携：交通安全指導員

活動概要：

熊本市や地域の警察署と協力し、大学周辺の自転車走行マナー向上に向けた政策提言や活動を実施する学生が活躍している。2015 年から活動を継続しており、自転車マナー向上を呼び掛けるステッカーデザインを学生公募し、学内で学生投票を行う試みである。2015 年は「左側通行の徹底」、2016 年は「イヤホン走行禁止」をテーマにデザイン募集が行われた。現在は、熊本北警察署、交通安全協会や交通安全指導員の皆さんとキャンペーン活動を行っている。

<学生の声>

私達キープレフトは自転車のマナーアップを目標に活動する有志団体です！熊大周辺の自転車マナーを改善するためにマナーアップステッカーを作成したり、コンペに参加してきました。また、地域の方々と協力し交通安全運動を行うなど地域に密着した活動を中心に行ってきました。この活動に参加することで多くの方との繋がりを持つことができます。地域の方々に加え、市役所や警察、企業の方など学生生活だけではあまり関わることもない方たちと活動する機会が多くあります。またアイデアを形のあるものまで作り上げるという経験はやりがいや充実感があります。この経験は就職活動でも『多くの方に興味を持っていただけた』、『印象に残りやすいと言ってもらえた』など有利に進められたとの声もあります！（Project Keep Left）

FB <https://www.facebook.com/projectkeepleft/>



子飼橋商店街入り口での呼びかけ活動



熊本北警察署と合同キャンペーン



2015年グランプリステッカー



2016年グランプリステッカー

(3) 熊本地域課題解決プロジェクト Kumarism

連携自治体等：天草市役所、熊本県

地域との連携：地域の高校生、民間企業等

活動概要：

平成 28 年熊本地震を契機に、風評被害に苦しむ県内観光地を支援するために立ち上がった学生団体。平成 28 年度は日本財団の支援も受け、熊本県女将の会の協力をいただきながら、天草地域や阿蘇地域の情報発信を行ってきた。立ち上げ当初は震災復興をメインの活動を行ってきたが、離島や山間地域などへき地の魅力を地元の方と発信したり、「観光」をキーワードに地域の企業さまとの課題解決にも取り組んでいる。

平成 29 年 3 月 5 日（日）、熊本日日新聞社で「熊本課題解決プロジェクト」が開催された。県内の企業様の課題を大学生が解決するために調査をしたり、提案をしたりするコンペで、Kumarism は熊本ホテルキャスル様とコラボし、課題解決に挑んだ。

学生と企業様とで、売り上げの 20%を占めている婚礼が、ここ数年急激に減少しているという問題の解決に向けて取り組んだ。若者が結婚式は何のために挙げるのかを考え、結婚式がワクワクしたものになるように高校生や大学生のうちからアプローチする「学婚（M:まなこん）」、「参

婚（S:さんこん）」、「決婚（K:けっこん）」の3ステップを準備した「MSK～ホテルで結婚式を挙げたくなる大作戦」を提案し、見事准グランプロをいただいた。

他にも、コンペでは大学生が県内企業と組んでいろいろな提案を行い、プレゼンの組み立て方、データによる論拠、聞き手をワクワクさせる仕掛け、コンペに参加した学生同士の交流など、お互いの専門性からどのように地域課題に取り組んでいけるのかという議論に刺激を受けたということだった。

プロジェクト参加大学・企業：

熊本県立大学×（株）木村
東海大学×（株）果実堂
熊本学園大学×（株）ロッキー
崇城大学×熊本電気鉄道（株）



Kumarism が運営するウェブサイト



熊本課題解決プロジェクトでのプレゼン

天草プリンスホテルさんで取材



（右：キャッスルホテル 福岡さん）
准グランプリを受賞

(4) COCサイエンスショップ型研究活動報告会 2016

平成 29 年 2 月 11 日（土）、熊本大学工学部百周年記念館においてサイエンスショップ型研究活動報告会「つながることで地域が変わる」を開催した。報告会では、4 つのプロジェクトチームが活動報告を行い、大学生と一緒に活動を行う自治体関係者や地域の方にも発表をお願いした。Project Keep Left（熊本市：自転車マナー問題の改善）、ZERO PROJECT（熊本市：ごみ出しマナー問題の改善）、Kumarism（天草市：地域観光情報の発信）、菊池広場 FC（菊池市：菊池広場の活用方法の検討）が報告され、90 名が参加した。会場に来られた地域の方からは、「大学生がこんなに地域の活動をしていることを知らなかった」「もっと関係が良くなると思う」「ありがたい」という声が聞かれ、本学の地域貢献の内容が地元の方々に発信できる場所となった。

また、Project Keep Left の立ち上げを行った本学の卒業生、新宮奈々花さん（佐賀県庁職員）を講師に招き、地域とつながることの面白さ、自分が変わっていくことの経験などを講演いただいた。会場には、彼女が卒業研究でお世話になった地域の方々も参加されており、大学生と一緒に活動することへの期待の声が聞かれた。



報告会の案内



プロジェクト発表①



プロジェクト発表②

5. 平成 28 年熊本地震復興支援

平成 28 年 4 月、2 度にわたる大地震が熊本を襲った。COC は地震直後からボランティアの窓口として様々な活動を行い、平成 28 年度は熊本地震に関する地域貢献にも積極的に取り組んだ。平成 28 年 6 月には学内に復興プロジェクトが立ち上がり、COC は復興ボランティア活動支援プロジェクトの窓口として活動を行った。学生ボランティアの登録数は 191 名（表 6）、ボランティア登録にかかわらず、個人または団体としてプロジェクトを通じてボランティアに参加した学生は延べ 1,101 名となり、新規に学生ボランティア団体も 2 団体設立された。

表 6 平成 28 年度熊本地震災害ボランティア登録状況（平成 29 年 3 月 31 日時点）

学 部	文学部	教育学部	法学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	合 計
人 数	23	45	29	12	10	6	66	191

（１）～大阪から熊本へ～仮設団地でガラスおこし

仮設団地の集会所をお借りし、ガラスおこしを開催した。お菓子の「岩おこし」に似ているためこの名前がついている。廃棄されるごみとなったガラスを材料とし、ガラスを色ごとに分別、砕いて砂状になったものを用いている。石鹸置きや仮設団地の表札づくりを目的として、開催した。

ガラスおこしに参加してくださる方は世代もバラバラで、家族で参加をされたり、お孫さんと参加をされたりであった。どんな模様を描くのか、参加者同士相談をしながら話も弾んだ。学生ボランティアたちは、子供たちの作品作りをお手伝いしたり、参加者のお話し相手になったりした。こうした活動は、仮設住宅の皆さんが少しでも「家を出てみようかな」のきっかけになればという思いで開催し、材料は大阪工業大学からのご支援をいただき、また焼き上げのための窯は熊本大学教育学部附属特別支援学校にご協力いただいた。熊本大学復興ボランティア活動支援プロジェクトの協力で、ご要望をいただいた仮設団地で開催している。



ガラスおこしの作品



仮設住宅での作品作り

（２）地元宇城市で活躍する熊大生

宇城市の社会福祉協議会や SEEDS Asia にお世話になりながら、震災後、地元宇城市でボランティア活動を継続した医学部保健学科の学生がいる。

がれき撤去などのボランティアのニーズが落ち着いてきたころ、次のステージとして要望をいただいたのが、避難所から仮設住宅への移動まで長く被災者と付き合える「長期で入れるボランティア」の要請であった。避難所から仮設住宅へ移るとき、仮設住宅での生活に慣れないとき、そんな時間を支えてくれるボランティアを求めているということであったが、自動車を持たない学生が多い本学ではニーズにこたえるのが難しかった。そのような中、ボランティア登録をしている学生に宇城市での活動を呼び掛けたところ答えてくれたのが、先の学生である。彼女は、「宇城市が出身なので地元のために役に立ちたい」と連絡をくれ、卒業の日まで活動を継続した。地域の方からは、地元の学生が来てくれることが心強いという声もいただいた。



仮設住宅で地域の方とのふれあう時間（医学部保健学科 4 年 熊野友美子さん）

（３）熊本地震学生ボランティア報告会「熊本地震における大学生のまなざし」を開催

平成28年10月16日（日）、熊本大学くすのき会館において熊本地震でボランティア活動をしている学生たちの報告会を開催し、81名の大学生が参加した。第1部は、「大学生だからできたこと」と題して、熊助組、Kumarism、416、グローバル教育カレッジ、益城町仮設団地聞き取りボラ（工学部社会環境工学科円山研究室）の代表者5名から活動報告があった。

熊助組からは、震災直後から幹部が集まり戦略を立てたこと、日ごろから社会福祉協議会などのネットワークがあったため、震災直後から活発な動きができていたことが報告された。Kumarism は、風評被害に苦しむ県内観光地を支援するために6月に立ち上がった団体で、学生自らが県内の観光地取材し、自分たちの立ち上げた観光支援サイトで情報発信を行っている。416は、熊本大学黒髪キャンパスの体育館で避難所運営を行っていた各団体の集まりで、当時

の活動を振り返り、次の後輩にむけて避難所運営で大切なことは何か、どのようなことを残しつなげられるのか、定期的に振り返り会を開催している。グローバル教育力レッジからは、黒髪体育館に避難をした留学生たちが、その後、語学教室やヨガ教室などを開催し、積極的に他の避難者との交流を図っていたこと、外国人対応ブースの運営などを行っていたことなどの報告があった。益城町仮設団地聞き取りボラからは、現在進めている仮設住宅での聞き取りを通して、傾聴ボランティアとしてのニーズを満たしていること、聞き取り調査の結果を今後の益城町の復興計画に反映させるべく日々活動を続けていることが報告された。

第2部は、「復興に向けた大学生の役割」と題し、会場内の隣同士で地震直後の自分自身の動き、活動の内容や今後参加をしてみたい活動など意見交換や情報交換を行った。自分とは違う活動をしている学生、実家が県外にある学生たちがどのような活動をしていたのか、今現在どのような活動に期待をしているのかなどペアを組んで話をした。

今回の報告会には、宮崎大学の学生も13名参加し、隣県の大学生たちがどのような活動をしているのか、将来的に隣県としてどのようなネットワークの構築が可能かなど、視野を広げたディスカッションもできた。参加した学生からは、情報交換のできるこのような場を、学内でもっと設定してほしいといった意見や、今後の活動をどのように展開して行くかなどの参考になったとの声が聞かれた。



報告会の様子



宮崎大学からの学生の参加

（４）第5回 紫熊祭にて「復興ブース」出展

熊本地震での避難所運営からはじまり、現在も続く災害ボランティアまで多くの学生たちと活動することができたおかげで、平成28年度の紫熊祭では、「復興ブースを設置したい」と学生から企画の持ち掛けがあった。11月4日～6日の3日間で開催された熊本大学黒髪キャンパスの学園祭（第5回紫熊祭）に参加し、熊本地震でお世話になった自衛隊と隣のブースで自信を振り返るパネル展示、新聞スリッパやゴミ袋カップの作成などをおこなった。

会場には、農業ボランティアで田んぼの草刈りをさせてもらった農家さんから購入したお米、益城町などの野菜を使ったメニューを展開する「元気食堂」が学生によって運営され、初日にはその農家さんも家族連れで参加されるなど、災害ボランティアを通じてできた関係に感謝する時間となった。3日間で200人近くの方に来ていただけたこと、春から始めた災害ボランティアが縁で、地域の方々からたくさんのことを学ぶ機会をいただき、また一緒に笑顔になれる時間を

学生たちが作ってくれたことを頼もしく思う時間となった。



ごみ袋カップの作成



ガラスおこしの作品作り

（５）「東北応援」関西ギャザリングへの参加

震災以降、各地域の学生ボランティアとの交流や意見交換、情報発信を目的として学生たちが神戸や東日本でのイベントに参加する機会があった。こうした機会を通じて、今後の被災地での活動や自分自身の将来について考えた学生たちが新しい団体を立ち上げるなどの動きを見せている。

平成 28 年 10 月 16 日（日）、神戸学院大学で行われた関西ギャザリングというイベントに参加した。復興庁からいらした方から復興庁の取り組みについて聞き、その後集まった団体がそれぞれ自分たちの活動や被災した当時の様子についてパワーポイントを使って説明した。

私は、前震発生から今に至るまでの行動や熊本大学の体育館の避難所での様子について発表した。偶然にも、この日は熊本地震の本震発生から半年という節目の時だったが、実際には 4 月 16 日から半年が経過したという実感がなく、あっという間の 6 か月だったように思える。関西ギャザリングでは、知らないところで全国の同じ大学生が熊本地震・東日本大震災の復興のために活動していることを初めて知った。まず、福島大学ボランティアセンターが行っている活動の中で私は 1 つの活動にとっても興味を持った。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生しもうすぐ 6 年を迎えようとしている中、目立つのが仮設住宅の空室だ。そこに目を付けた福島大学ボランティアセンターは、「いだけ支援」という活動に乗り出した。これは、1 年に 2 人ずつ 4 か月ごとに 3 サークルが仮設住宅の空室に住むという活動だ。空室が増えるこ

とによって仮設住宅全体の静寂が進み、いまだに仮設住宅の生活を強いられている人たちは寂しい思いをする。しかし、学生が住むことによって学生ならではの活気で仮設住宅に住む人たちは元気になり活性化が期待される。また、学生自らも人生の先輩方とおしゃべりをしたりすることで、学校などでは習わない様々な知恵などを知ることができ、お互い様の関係の構築が可能だ。さらに DASH 村を始めたということで、よりもっと仮設住宅に活気がでるだろう。

次に石巻専修大学の発表で何か復興のために企画をして仮設住宅などで行いたいと考える際、自分たちで勝手に考えて行うのではなく、実際にその場所に足を運び要望を聞いたうえで行うことがとても大切であると学んだ。また、石巻のお祭りで熊本地震のための募金活動を行い大津市に寄付していたことを知りありがたいと思ったと同時に私たちも改めて東北の復興のために活動し、熊本と東北が一緒になった復興をしていければよいと思った。また、何か行う際はボランティア側と受ける側の内と外の関係を大切にして行うべきだと寺本若葉さんの話を聞いて学んだ。

今回参加して、何か活動するからこそ見えてくるもの、そしてボランティアをしに行くのではなく「～に会いに行こう」という気持ちでこれから活動していこうと思った。このような機会をくださった安部先生（熊本大学）、神戸学院大学、宮本先生（兵庫県立大学）には感謝の気持ちでいっぱいである。今回学んだことを今後の活動に生かしていき、たくさんの笑顔に会うことを目的として頑張っていきたい。

（文学部コミュニケーション情報学科 1 年 澁谷明佳）



参加学生との集合写真

今回、神戸学院大学で開催された「東北応援」関西学生ギャザリングに参加させていただいた。東北、関西、熊本の学生が一同に集い、活動報告やグループワークなどを通して、情報を共有したり、これからの可能性について話し合ったりして有意義な時間を過ごすことができた。その中で特に印象に残っていることが2つある。

1つ目が、福島大学の活動の1つの「いだけ支援」だ。震災から5年が経過し、仮設住宅を離れる若い人が増えている。そこで、仮設住宅の空き部屋を利用してそこに学生が住み、声掛けなどを行うことで、高齢化が進む仮設住宅で「孤立死、関連死、自殺」をなくそうという試みだ。一緒の場所で暮らすことにより、信頼感が得られ仮設住宅に暮らす人々も要望や相談などしやすい関係になれるのではないかと。熊本は現在仮設住宅の建設が進んでいるが、全く足りておらず、今は私たちが同じような支援をすることはできない。しかし、長い目で見ると、同じように仮設住宅から人が減っていき、高齢者が取り残されてしまうことも予想される。長期的に寄り添う支援をしていきたいと考える。住むことはできないが、通うことはできる。できるだけ仮設住宅に足を運びたいと思う。

2つ目は、寺本わかばさんが結成したグループである「わかばミーティング」の活動だ。寺本さんは神戸大学の学生で、現在は休学し、西原村でボランティア活動を行っている。寺本さんの活動で最も印象に残っていることは、地域に根差した復興をしているところだ。その例が炊き出しだ。おかずを炊き出してもらうから、地域のお母さんたちにご飯を準備してもらい、お父さんたちに会場をセッティングしてもらうなど、自発的な復興であるように感じた。周りに頼るだけではないところがすごく良いと思い、印象に残っている。

今回参加して感じたことは、自分の無力さだった。震災を経験してすぐの頃はいくつかのボランティア活動を行っていたものの時間が経つにつれて遠ざかってしまっていた。しかし、震災を経験していない関西の学生の方が東北のために、熊本のために活動してくださっているのを聞き、現地にいる自分は何をやっているんだろうと感じるとともに、これから熊本の復興のために現地にいる自分だからこそできることを見つけ、活動していこうと強く思った。

(文学部コミュニケーション情報学科 1年 小村千紘)



関西ギャザリングへの参加が契機で立ち上がったD-SEVENの活動（西原村）

（６）平成 28 年熊本地震 熊大黒髪避難所運営記録集

「416 私たちがやったこと 未来へ伝えたいこと」

平成 28 年 4 月 14 日、16 日の地震後、熊本大学も被災し多くの学生が黒髪キャンパスの武夫原グラウンドに詰めかけた。グラウンドには、地域方々も集まり不安な夜を過ごすこととなった。大きな揺れのあった 4 月 16 日からは、黒髪体育館や全学教育棟が開放され、避難所として運営された。避難者として集まった学生たちは、避難所運営の主体となり避難所運営のボランティアとして活動していくこととなった。初めての避難所運営で直面した課題、あの時避難所となった体育館ではどんなことが起こっていたのか。どのような備えが必要で、どのようなマネジメント能力が求められていたのか。避難所運営に携わった学生たちは、避難所閉鎖後の 5 月から定期的に集まり、4 月 16 日から 30 日の避難所閉鎖を迎えるまでの 2 週間を振り返ってきた。

「後輩たちが同じように避難所運営をすることになったら、困らないように。」

次に起こるかもしれない災害で、何年後か先の後輩たちが自分たちと同じように避難所運営をするための、役に立つものを残したい。そうした声は避難所運営中に学生から届けられ、記録集作成の支援をおこなった。

冊子後半には、避難所の受付簿や支援物資の受け入れ簿など、直後にあったらよかったと思ったリストがついており、避難所ですぐ使えるようになっている。学内の備蓄倉庫にもペン、用紙、ゴミ袋などとセットにしたものが設置された。

記録集のダウンロード先

http://coc.kumamoto-u.ac.jp/archives/type_quake/876



本部会議の様子



記録集「416 私たちがやったこと
未来へ伝えたいこと」

（７）観光地復興支援団体「Kumarism」発足

平成 28 年 4 月 14 日、16 日に発生した熊本地震では、大きな被害を受けなかった県内の観光地で風評被害が発生した。地震以降の宿泊予約は軒並みキャンセル、ゴールデンウィークも観光客が来ないという状況で、被害がなかったにも関わらず苦境に立たされた観光地がいくつもあった。Kumarism は、熊本大学復興プロジェクトや日本財団、熊本県女将の会の支援を受け、被災地の観光地、風評被害に遭われた観光地の情報発信を目的とし、学生たちがサイト運営による情報発信で復興支援をしている。

今回の地震だけではなく、ゆくゆくは地域の魅力を学生目線で発信できるものというのが彼らの狙いで、ウェブサイトには、各地域で学生たちが取材し、地域の皆さんとお話をしながら集めてきた情報が更新されている。県外からの観光客だけではなく、熊本の皆さんにお勧めできる情報発信、「こんな楽しみ方があったんだ！」と発見していただけるような情報発信が試みられている。

Kumarism の HP

<https://ja.kumarism.org/>

（８）チューリップで復興支援

復興支援の一環で、神奈川県からたくさんのチューリップの球根が届いた。（一財）防災教育推進協会主催による、藤沢市の大型ショッピングセンターで開催した防災イベントで、神奈川県下のガールスカウトの子ども達が熊本地震被災地にチューリップの球根を贈る募金活動を行ってくれたものである。ガールスカウトの子ども達から届いた 1,000 個の球根は、「ひかわスポーツクラブ」さん、「Fun & Fit」さんにご協力いただき、各団体が支援に入られていた幼稚園、保育園、小学校で希望を頂いたところにお配りした。本学の学生たちが運動支援でお世話になっていた、御船町立滝尾小学校にもお渡しさせていただいた。

お配りさせていただいたチューリップの花が咲くと、各方面から素敵なメッセージや写真が寄せられ、滝尾小学校や菊陽南小学校から素敵なお報告が届いた。



綺麗に咲いたチューリップ

（９）熊本大学ボランティアバスの運行

平成 28 年 6 月、学内に復興プロジェクトが立ち上がり、多くの学生が被災地支援活動をおこなっている。お手伝いを必要とする被災地には少し距離がある地域もあり、車やバイクをもっていない学生は、移動手段の確保に苦慮している。「それでも、何かやりたい」という学生たちの声にこたえるため、様々なボランティア活動の方法を準備した。

夏には、毎週土曜日に大学の公用バスを利用し西原村や、御船町、菊池市などでボランティア活動を実施した。瓦礫の撤去だけではなく、キャベツ畑の草抜き、地震で倒れたしいたけの原木起こし、地震後の大雨で流れてしまった稲の植えなおし、ビニールハウスの撤去など活動は多岐にわたった。

普段交流することのない世代、地域の方々とのコミュニケーションを通して、災害復興を考えること、中山間地域の生活を考えること、農業の大変さを経験すること、1つ1つが学びの場になっている。



熊本大学ボランティアバス運行



農業ボランティア
(大雨で浮いた稲の植え直し)



農業ボランティア（キャベツ畑の草抜き）



阿蘇市での水害被災地での泥かき後

（10）音楽で復興支援 さゆり・チャン復興支援コンサート

グローバル教育カレッジのCHAN CHEONG JAN (珍 チェン ジェン) 先生は、学生と一緒に音楽での復興支援を行っている。留学生も参加するこの支援では、知的障がいを持ちながらも福岡、熊本や海外で精力的に演奏活動を繰り広げている白井小百合さんと CHAN 特任教授とがマリimbaとピアノで熊本地震復興支援チャリティーライブを開催しているものである。「おもちゃのチャチャチャ」、「雪やこんこ」、「さんぽ」「365 歩のマーチ」、「真赤な太陽」、「水戸黄門」など広く親しまれている楽曲を息の合った演奏で約1時間に渡り披露し、保育園の園児や会議施設の利用者、地域の方々と一緒に歌ったりしている。

誰もが知っている音楽を通して、笑顔になったり、楽しくなったり、手拍子が自然と出たり。1時間があっという間に感じる音楽会は、毎回大きな歌声や笑い声が印象的である。チャリティーライブは、益城町や川尻で開催されたほか、熊本大学教育学部芸術系講座及びグローバル教育カレッジの共催により、「演劇ワークショップ“身体による感情の伝え方～イタリア古典仮面劇コンメディア・デッラルテの技法から”といった演劇にいたるまで、芸術を通じた支援活動として広がっている。



福祉施設での演奏風景

（11）全国学生ボランティアフォーラム in 神戸に参加

関西学生ギャザリングに続き、コンソーシアム兵庫主催によるイベント、「全国学生ボランティアフォーラム in 神戸」に学生が招待された。

今回のフォーラムでは、集まったそれぞれの学生が自分の利益より他の人のことを思いながら行っている様々な活動を知ることができ、またその幅広さに驚き、圧倒されることばかりだった。参加していた学生の方は自分の活動している地域の事をしっかりと知っていた。しかし私は、地元熊本のことを質問されたときにほとんど答えることができず、とても情けなかった。この経験から 私は、これからの自分の活動において、しっかり事前に調べ、知識を得てから実行に移すことを大事にしていこうと思った。具体的には、熊本地震発生時の事、避難後の事、復興が始まりつつある今の事についてもっと知ろうと思った。

また、人に発信することが大切であると思った。自分たちが活動を行っているだけでは、その対象者以外の人々の心を動かすことはできない。しかしそれを同じようにボランティアというものに取り組んでいる人同士で共有し、意見をぶつけ合うことで、それぞれがより良いものを得られるということをディスカッションなどの活動を通して身をもって感じた。

今回フォーラムに参加して、自分たちのできることはたくさんあること、まだまだ不十分な点ばかりであることに気付くことができた。そして何より、神戸で多くの人たちとかわりたくさんのつながりが生まれたことが大きな収穫だった。このつながりを活かして、同じ意志を持つ団体同士で協力しながら様々なことを企画し実行にうつしていきたいと思う。

（文学部 1 年 高山 琳）



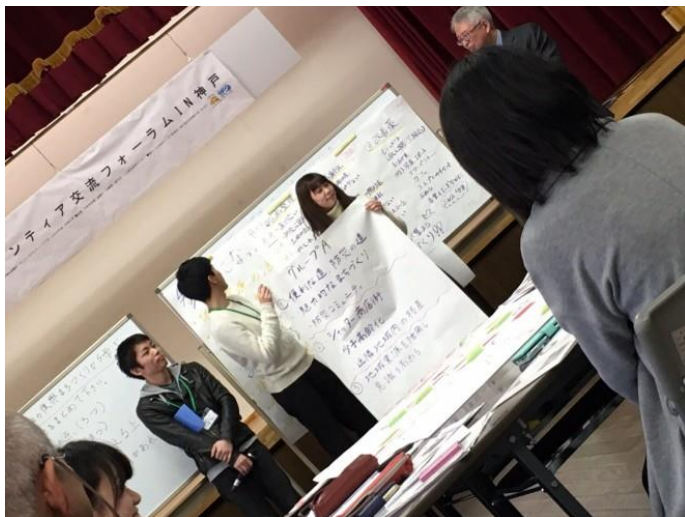
ワークショップの様子

2月15日から17日まで、全国学生ボランティアフォーラム in 神戸に参加させていただきました。全国各地からボランティア活動の経験がある学生が集まり、フィールドワークや意見交換を行いました。

このフォーラムに参加して感じたことは、学生同士でのつながりの大切さです。住む場所も、学年も違う50人近い学生が集まったわけですが、他大学の学生との交流は刺激になることばかりでした。私たちは2016年11月に新しくできた団体であるD-SEVENを代表して参加したのですが、まだ立ち上がったばかりで今後の方向性なども明確に定まっておらず、そのヒントになりそうなことを学ぶというのが今回の目的の1つでもありました。夜に宿泊施設で何気なくその話をしたときに親身になって熊本のことを考えてくださり、自分たちの経験を踏まえながらアドバイスをたくさんもらいました。その声を聞いた隣の部屋の学生も集まってきて、自分たちの活動についてや、これからについて真剣に語り合ったことは絶対に忘れられない経験になりました。全国の学生とつながり、仲良くなることができたので、これから協力して活動を行ったり、困った時には相談しあったりすることができると思うと、すごく楽しみで心強いなと思います。また、熊本の他大学の学生とのつながりができたこともよかったです。これからの活動のことを考えると、同じ地域の大学生同士での協力は大切になってくると思います。そのつながりもできて本当にいい経験をさせてもらいました。

このフォーラムで、様々な意見に触れてまた自分の意識が変わりました。今回学んだことをこれからのD-SEVENの活動にいかしていきたいと思います。参加できて本当によかったです。ありがとうございました。

(文学部1年 小村 千紘)



発表の様子



左から、高山琳さん、小村千紘さん

（12）宮城教育大学との学生ボランティア交流

平成 28 年 8 月 29 日、熊本大学医学部山崎記念館で、宮城教育大学の学生ボランティアの方々との交流会を開催した。宮城教育大学からは、10 名の学生ボランティアの方々が御船町や熊本市内の学校で教育ボランティアをされている。熊本大学からは、震災当初から避難所運営やボランティアセンターでの活動、仮設住宅での支援活動などを継続している学生 5 名が参加し、活動紹介や震災当時どのようなことをしていたのかなど、「あの時」の状況を共有した。

宮城教育大学の皆さんからは、平成 23 年に発生した東日本大震災の時の状況、当時中学 2 年生で被災した時の気持ちやその後の生活、自分自身の被害が大きくなくても友達の厳しい状況を見た時の苦しさ、仮設住宅での生活をする中で将来を考えたことなど、お互い被災者になったからこそ共有しあえることや気持ち、今の生活を教えていただいた。

目に見えないところにある復興。100%共有してあげることにはできないという現実。

熊本でも直面する（すでにしているかもしれない）こうしたやるせない感情をバネに、被災を経験した私たちだからこそできる、経験をつなぐという作業があると思う時間になった。



意見交換の様子



参加学生集合写真

（13）京都学生祭典で熊本県産品を PR

平成 28 年 10 月 9 日（日）、京都市の岡崎公園で開催された京都学生祭典の復興ブースで、熊本県産品を学生が PR した。東日本大震災以降、東北の学生たちによる出展ブースが設けられていたそうですが、今年は熊本地震後ということもあり、熊本の県産品を PR する機会をいただくことになった。熊本県大阪事務所や京都学生祭典実行委員の皆さんのご協力をいただきながら、熊本大学のブースでは、いきなり団子、馬力レー、トマトジュース、長なすの 4 品を販売した。一番人気は、いきなり団子であっという間に売り切れた。

「九州出身なので」「熊本が地元なんです」「以前食べたことがあって」と来店してくださる方や、「いきなり??？」と興味を持ってくれる方など様々で、本学の OB の方々も足を運んでくれた。隣のブースは福島大学の学生さんが運営しており、彼らとも交流する時間となった。



岡崎公園での出展の様子

（14）御船町立滝尾小学校での運動支援ボランティア

熊本地震の影響で、学校周辺の道路状況が悪くなり御船中学校に間借りをするようになった滝尾小学校。 体育の授業だけではなく、もともとあったサッカー部やミニバスケットボール部の部活動も十分できないとのことで、子供たちに体を動かす時間をとということでボランティアのお話をいただいた。

10月から、毎週月・火・木の放課後、晴れた時は御船高校のグラウンドをお借りして運動支援を、雨の日は学校で算数の問題を解く学習指導をさせてもらった。仮教室のある中学校までの道のりは遠く、児童の多くはバス通学をしている。バスの時間までの1時間弱が、学生ボランティアの活動時間となった。準備運動のために、まずは軽くランニング、その後は「手つなぎ鬼」や「ケイドロ」といった子供の遊びを全力でやり、遊びの後には折り返しリレーなどチーム対抗の課題を1つ準備した。

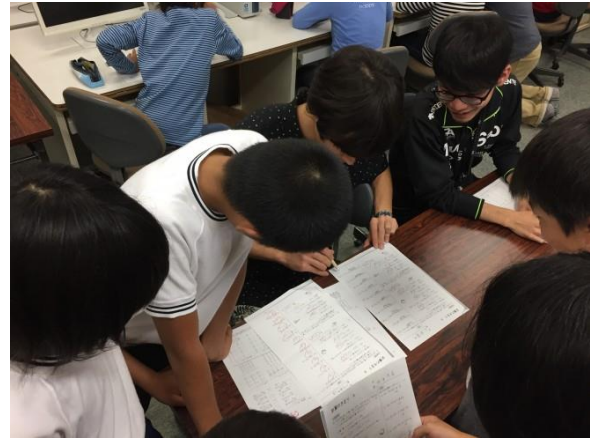
リレー後に聞く子供たちの感想に、「3回とも勝てなかったけど、楽しかった！」という声があった。負けても楽しかった。そう思ってもらえる時間を作っていることに学生たちは感慨深げな様子であった。

あいにくの雨の日は、学校に残って算数の問題を解く。大学生たちは問題の解き方を教えたり、採点をしたりしながら、分数が解けた時の嬉しそうな顔、掛け算のひっ算が解けた！といった時の子供たちの誇らしげな顔をみて、大学生たちは更に嬉しそうな顔をしている。

こうした活動を通じて、学生たちからは「将来中学校の体育の先生になりたい」「養護の先生になりたい」「ボランティアに関わる中で探していきたい」という声が聞かれた。ボランティアに参加する動機はそれぞれであるが、大学生たちにとっても刺激的な時間になっているようだった。



運動ボランティア



学習ボランティア

滝尾小学校の支援活動は、11月29日をもって最終回となり、12月末にはいつもの滝尾小学校の場所で授業が再開されている。

最後のあいさつでは、児童から「地震があって体育ができなかったけど、本当に楽しかった」という言葉をもらい、大学生からは「次に会うときは、お互いどんなことを一生懸命頑張ったのか、報告しあえるようにしましょう」という言葉が返された。「今度は滝尾で逢おうね」という小学生と大学生の約束を受け、給食会や活動報告会にお招きいただくなど交流が続いている。

（15）南阿蘇村でのボランティア活動

8月27日（土）、学生6名が南阿蘇村の災害ボランティアに参加した。熊本地震で家屋が壊れ、その後の豪雨で裏山が崩れて土砂災害に見舞われた地域である。他のボランティア団体とともに、1件の民家の瓦礫撤去と土砂の撤去作業を行った。床下に潜って土砂を掘出す人、出した土砂を運びだす人、学生たちは泥まみれになりながら力を合わせて積極的に取り組んだ。

家主の方からの「ありがとう！」の言葉に、真っ黒になりながら笑顔を見せる学生たちの姿が印象的な活動となった。



震災後の豪雨によって床下に入り込んだ土砂を掘り出す作業

6. 熊本県立大学との共同事業

熊本県立大学との共同事業を進めるため、年間2回の打ち合わせを実施した。

平成28年度の取り組みとしては、熊本地震が起き、各大学の事業の中に「復興支援」が追加されたため、熊本地震後に「復興支援」をテーマに避難所運営に携わった学生の交流会を開催した。

また、熊本大学 COC／COC＋合同シンポジウムサイエンスショップ型研究活動報告会 2016「つながることで地域が変わる」にて、各大学の活動状況等をポスター展示等にて報告した。

<第1回>

日 時：平成28年6月2日（金） 15：00～16：00

場 所：熊本大学 共用棟黒髪Ⅰ 4F 政創研会議室

出席者：熊本県庁 企画振興部企画課 主幹 藤本 麻衣

熊本県立大学 COC 推進室長 堤 裕昭

文学部 教授 鈴木 元

COC 推進室 特任准教授 野口 慎吾

COC 推進室 参事 高本 篤

COC 推進室 事務補佐 山口 貴義

熊本大学 政策創造研究教育センター 教授 上野 真也

政策創造研究教育センター 特任助教 安部 美和

政策創造研究教育センター 特任助教 天野 慧

政策創造研究教育センター 技術補佐員 福井 奈美

議 題：

1. 平成28年度のCOC共同事業推進体制について
2. 平成28年度共同事業実施について
3. その他

<第2回>

日 時：平成28年11月10日（水） 11：00～12：00

場 所：熊本大学 共用棟黒髪Ⅰ 3F KICO会議室

出席者：熊本県立大学 COC推進特任 准教授 野口 慎吾

COC 推進室 特任講師 佐藤 忠文

COC 推進室 参事 高本 篤

COC 推進室 事務補佐 山口 貴義

熊本大学 政策創造研究教育センター 特任准教授 安部 美和

政策創造研究教育センター 特任准教授 天野 慧

政策創造研究教育センター 技術補佐員 福井 奈美

議 題：

1. 本年度の共同事業報告会の開催について
2. 活動状況の情報共有
3. その他

平成 28 年度 熊本大学×県立大学連携事業 学生ボランティア交流

日 時 : 平成28年7月1日(土) 18:30~19:30
場 所 : 熊本県立大学
人 数 : 12名
目 的 : これまでのボランティア活動について情報を共有し、今後一緒に活動ができそうな案件について検討する。

平成 28 年 7 月 1 日、熊本大学と熊本県立大学の学生交流をおこなった。熊本大学からは 4 名、熊本県立大学からは 8 名の学生が参加した。熊本地震以降、多くの学生が地域でボランティア活動をしており、それぞれの活動を共有し今後一緒にできる活動を見つけるため、ワークショップを開催しシーズを探ることとした。

会場では、ニーズマッチングゲームを行った。12 名の学生を 6 名ずつの 2 グループに分け、自己紹介のときに自分の特技・自慢を 3 つ発表する。その内容をふせんに書いてホワイトボードへ貼り付け、全員が出し終わったら、そのボードをグループで交換し、特技や自慢を見ながら、「この人にはこんな仕事を任せられそう」を書き出していく。「少し英語」と書いた特技には、「通訳」「(避難所での)勉強会」「英語でのルール作り」などができそうな仕事として提案されていた。「文房具を見るのが好き」には、「用具管理」。「たくさん寝られる」には「寝具の準備」や「運搬」。「フルートの演奏」には、「避難所コンサート」や「ストレス発散」が、また「護身術」という特技には「治安維持」や「護身術教室」「避難所のパトロール」といった提案がされた。各チーム、18 件の特技・自慢に対し 34 件と 49 件の「こんな仕事を任せられそう」が出され、多くの提案をできたチームの勝ちとした。

交流会の最後は、出身地の共有と出身地のふるさと自慢でしめた。天草出身の学生が多く、お互いに驚きつつ、震災支援も含め地域の課題解決に向けて色んなコラボができたらいいなと思える時間となった。



任せる仕事を考えるワークショップ



両校の学生で集合写真

7. 社会人の学び直し、eラーニングを活用した生涯学習

県内住民に対する地域貢献事業として、ビジネス人材育成事業と、eラーニングを活用した生涯学習事業を社会人の学び直し事業として実施した。

(1) ビジネス人材育成事業

熊本経済同友会と連携し、加盟企業の人材育成担当者向けに、研修設計の専門的スキルであるインストラクショナルデザイン教育設計学を学ぶ講習会を実施した（表 10）。

講習会名：研修設計入門～自ら学ぶ人材を育成するために～

日 時：平成 29 年 2 月 2 日、2 月 16 日

受講者数：14 社 21 名

概 要：

本セミナーでは「やる必要のない（あるいは、やらなくても問題が生じない）研修」を行う無駄を避け、業務直結型で組織に貢献できる研修を設計するための基礎的な知識とスキルを修得することを目的とする。インストラクショナルデザイン（教育設計学，以下 ID）の理論や方法論を用いて、研修で何を教えるか、どう教えるかだけでなくなぜそれを教えるか、学ぶ必要があるのかを明確にすることで、研修を「ただのお勉強」で終わらせず、研修の受講者がその成果を実務に役立て組織に貢献する研修の設計ができるようになることを目指す。今回のセミナーでは、研修改善に向けた ID の基礎知識を身につけると同時に、学んだことを職場に活かしていくことを目的とした。

学習目標：

1. 4つの ID モデル（TOTE モデル・ID の第一原理・ARCS モデル・評価の4段階モデル）のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる
2. セミナーで学んだ ID モデルを自分の教育事例の改善に応用していこうと思う

評価方法：

1. ID モデルを応用して研修事例の改善案をワークシートにまとめ、提出すること
 2. セミナーでの学びを踏まえて、研修の改善に向けたアクションプランをまとめること
- と研修 3 ヶ月後の郵送によるアンケートと 6 ヶ月後の個別インタビューで実行状況を確認する



セミナーの様子

本セミナーでは、研修を「ただのお勉強」で終わらせることなく、
「実務に役立て、組織の発展に貢献する」
人材を育成する研修の設計法を紹介し、

研修の成果を上げたい人材育成担当者の方へ

研修設計入門

～自ら学ぶ人材を育成するために～

講師 鈴木克明（熊本大学大学院教授 / 教授システム学専攻長） ※2日目のみ
平岡資士（熊本大学大学院准教授）

主催 熊本大学政策創造研究教育センター／熊本経済同友会

対象 ☒ 以下の項目に一つでも当てはまる方は、ぜひご参加ください！

- ☐ 急に人材育成担当者になり、どこから手をついたらよいかわからない
- ☐ 実は「研修なんてヤメてしまえ！」と思っている
- ☐ 研修の効果を上昇させることにはあきらめている
- ☐ 研修中に社員が内職しているのを目撃した
- ☐ 上司から「研修の成果は何？」と聞かれて、答えに詰まってしまう経験がある
- ☐ 同僚から「また、研修ですか？」と不満を言われてしまったことがある
- ☐ その他、研修でお悩みのすべての方

日時	2017年 2月2日(木) 及び 16日(木) 13:00～17:00	会場	2月2日 熊本大学国際交流館 4階 第2研修室 2月16日 アークホテル熊本駅前 2階 第2研修室	定員	40名	申込締切	1月19日(木)
----	--	----	--	----	-----	------	----------

申込・お申し込み 熊本経済同友会 事務局 ※申込は必ず電話にて、お断りください
熊本市中央区城東町4-2 熊本ホテルキャッスル2階 ☎096-353-0051 / 096-322-5343 FAX

研修設計入門セミナーの案内

（2）eラーニングを活用した生涯学習事業

これまで東京、大阪、名古屋、福岡で開催してきた熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン入門編」（<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/syogaigakushu/koukai/id/>）を平成28年度は、熊本で初開催した。

講座名：熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン入門編」

日 時：2016年10月15日

受講者数：30名

概要：

本講座では、教育・研修をより効果的・効率的・魅力的にするための方法論であるインストラクショナルデザイン（以下、ID）を習得することを目的とする。大学教職員や中学高校教諭、医療系職種従事者、企業内の研修担当者等、教育に従事する多様な社会人を対象とし、eラーニングでの事前事後学習、対面ワークショップを通じて、IDの基礎的なスキルを実践的に学ぶ。講座を通じ、学習者を動機づけるための手法や、学びを支援するための働きかけに関する理論を事例とともに学び、受講者が抱える課題を解決する糸口をつかむ。

学習目標：

1. IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる
2. ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる

評価方法：

1. 実力チェックテストを受験し8割以上、得点すること
2. 最終レポートを提出し、8割以上得点すること



公開講座のeラーニングコンテンツ



公開講座の様子

8. 平成29年度の取り組みに向けて

地域課題を解決できる人材育成のため、肥後熊本学の検討や地域志向科目群の整備、課題解決型学習（PBL）の設計など平成28年度は、次年度以降の本格的な教育開始に向けて体制を整えてきた。平成29年度は、地域の学びへの導入科目である「肥後熊本学」必修化される。また、「地域志向科目群」は35科目開講され、PBL科目も4科目が開講予定である。

平成29年度は、フィールドワークを取り入れた教育カリキュラムの開発を継続するとともに熊本地震の被災地復興に向けた学生ボランティアの支援も実施していく。

9. その他資料

下記に、平成 28 年度の事業内容一覧及び会議関係資料を示す。

表 5 サイエンスショップ型研究

プロジェクト	内 容	地 域
ZERO PROJECT	熊本市のクリーンセンターや大学周辺の自治会と協力し、大学周辺のごみ出しマナー向上に向けての活動。	熊本市
Project Keep Left	熊大周辺の自転車マナーを改善するためにマナーアップステッカーを作成したり、コンペに参加している。また、地域の方々と協力し交通安全運動を行うなど地域に密着した活動を中心に行っている。	熊本市
熊本地域課題解決プロジェクト	(株) 熊本ホテルキャッスル様とコラボし、売り上げの 20% を占めている婚礼が、ここ数年急激に減少しているという問題の解決に向けて取り組んだ。	熊本市

表 6 課題解決型フォーラム等の開催

フォーラム名	参加者数 (人)
熊本地震学生ボランティア報告会	81
平成 28 年度熊本大学COCサイエンスショップ型研究活動報告会 2016	90
COC/COC+合同シンポジウム - 熊本地震からの復興と教育プログラム -	111

表 7 市民向け公開講座（知のフロンティア）の実施

タイトル	開催回数	開催日
江津湖でジョギング&ウォーキング	5回	5/8 (日)、6/12 (日) 7/3 (日)、8/7 (日) 9/10 (土)
防災・減災を考える	5回	10/1 (土)、10/8 (土) 10/15 (土)、10/22 (土)、10/29 (土)
水前寺参道での健康講和	4回	9/23 (金)、11/4 (金) 1/6 (金)、3/17 (金)
高齢者の運動指導者研修会	2回	6/15 (水)、3/17 (金)
高齢者向けの講演会	1回	9/29 (木)
くちビルディング選手権	1回	2/26 (日)
江戸時代の裁きと仕置き（関西オフィスセミナー）	1回	9/9 (土)
文学から読み解く歴史の実像（東京オフィスセミナー）	1回	9/25 (日)

表8 市民向け公開講座の実施

講 座 名	募集人数	開講日
薬を知ろう！～大衆薬・サプリメント編～	20	6/11～10/8
陸上競技教室	40	7/16～8/27
ポジティブ・ディビアンズ： 身近にある解決策を見つけ出そう	20	8/5～8/7
リーダーシップ・トレーニング	36	10/20～1/21
薬を知ろう！ ～医療用医薬品（病院・薬局でもらう薬）編～	15	10/15～11/19
世界の宗教と思想から見る「自然災害」	30	10/22～12/17
教育デザイン・ワークショップ入門編	200	10/15～11/20
教育デザイン・ワークショップ応用編	120	1/14～1/22

表9 自治体・起業等包括連携

	機 関	備 考
自治体等	天草市（平成 16 年 3 月 29 日）	平成 26 年度まで
	葦北郡芦北町（平成 18 年 12 月 4 日）	平成 26 年度まで
	熊本市（平成 19 年 4 月 26 日）	平成 26 年度まで
	水俣市（平成 19 年 8 月 4 日）	平成 26 年度まで
	菊池市（平成 26 年 8 月 18 日）	平成 26 年度
企業等	富士電機システムズ株式会社	平成 26 年度まで
	DOWA ホールディングス株式会社（平成 19 年 2 月 16 日）	平成 26 年度まで
	株式会社熊本日日新聞（平成 23 年 2 月 23 日）	平成 26 年度まで
	特定非営利活動法人 NEXT 熊本（平成 23 年 4 月 13 日）	平成 26 年度まで
	不二ライトメタル株式会社（平成 23 年 9 月 1 日）	平成 26 年度まで
	熊本県不二ライトメタル株式会社 株式会社日本医療機器技研	平成 27 年度
	熊本県株式会社肥後銀行 一般社団法人熊本県工業連合会 株式会社リパネス	平成 27 年度
	日立造船株式会社	平成 27 年度

表10 ビジネス人材育成講座の開催

講 座	参加団体	参加者数	開催日
研修設計入門 ～自ら学ぶ人材を育成するために～	熊本大学 熊本経済同友会会員企業	21	平成 29 年 2 月 2 日 平成 29 年 2 月 16 日

ウェブ報告会：動画で見るCOC事業の取り組み

COC事業の活動を教職員・学生および自治体、地域住民へ向けて幅広く周知するために、インターネット上で動画コンテンツを公開している。動画コンテンツは、特設サイト(<http://coc.kumamoto-u.ac.jp/session>)にアクセスすることで、パソコン・スマートフォン・タブレット等から視聴することができる。



◆平成28年度公開◆

熊本大学 COC サイエンスショップ型研究報告会 「つながることで地域が変わる」

事例報告1 大学生の自転車マナー向上に向けた活動：PROJECT KEEP LEFT

学生：立藺隆康（熊本大学法学部 4年）

行政：下城収宏（熊本北警察署交通課）

地域：内藤豊（SCB 自転車塾）

事例報告2 地域のごみ問題解決に向けた取り組み：ZERO PROJECT

学生：越替彩花（熊本大学理学部 2年）、阿南陸（熊本大学工学部 1年）

行政：小島秀樹（熊本市役所北部クリーンセンター）

地域：安藤邦夫（黒髪校区第4町内自治会会長）

事例報告3 熊本の観光地を盛り上げ発信する活動：Kumarism

学生：岩城聡子（熊本大学法学部 4年）

行政：平山高広（天草市政策企画課）

地域：牛深高校学生（ビデオメッセージ）

事例報告4 菊池広場の魅力的な活用を創造する：菊池広場F C

大学：田中尚人（熊本大学政策創造研究教育センター 准教授）

行政：中嶋大樹（菊池市役所企画政策課）

地域：坂本利正（一般社団法人 菊池教育会専務理事）

熊本地震学生ボランティア報告会

第1部 熊本地震を振り返って（5団体からの活動報告）

熊助組、Kumarism、416、グローバル教育加ッヅ、益城町仮設団地聞き取りボラ

第2部 フロアディスカッション

・募集中のボランティア、今後の動き

・フロア交流会

（パネルの紹介や団体の説明、情報交換など）



熊本大学 地域創生推進機構運営委員会

設置目的

本会議では主に、ＣＯＣ事業全体にかかる方針、文部科学省や学外団体・機関等との関係事項対応を審議・決定する。

<第1回>

日 時：平成28年6月22日（水） 10：30 ～12：00

場 所：本部棟3階 特別会議室

出席者：原田信志機構長（委員長）、松本泰道副機構長、古島幹雄理事、村里泰昭学長特別補佐、隈元貞広教授、尾原祐三教授、上野眞也教授、都竹茂樹教授、柳瀬寿マーケティング推進部長、北村敏夫学生支援部長

議 題：

1. 平成28年度地域創生推進機構運営委員会メンバー変更及び申合せ事項の承認について
2. 平成28年度地域創生推進機構連絡協議会メンバー変更及び申合せ事項の承認について
3. 平成28年度熊本大学地域創生推進機構外部有識者評価委員会メンバー変更及び申合せ事項の承認について
4. 平成28年度ＣＯＣ事業計画について
5. ＣＯＣコースプログラム認定について
6. 平成29年度以降の肥後熊本学について
7. その他

報 告：

1. 「地（知）の拠点整備事業」アンケートについて（参考1）
2. 平成27年度実績報告書について（文部科学省：5/19 提出済）
3. 平成28年度調書提出について（文部科学省：3/28 提出済）

<第2回>

日 時：平成28年11月22日（火） 13：00 ～13：30

場 所：本部棟3階 特別会議室

出席者：原田信志機構長（委員長）、松本泰道副機構長、古島幹雄理事、隈元貞広教授、上野眞也教授、都竹茂樹教授、北村敏夫学生支援部長、北村敏夫マーケティング推進部長

議 題：

1. 熊本大学熊本創生推進機構の設置に係る答申内容の検討について

報 告：

1. 平成28年度ＣＯＣコース履修状況について
2. ボランティア活動について

<第3回>

日 時：平成29年2月22日（水） 10：00 ～10：30

場 所：本部棟3階 特別会議室

出席者：原田信志 機構長（委員長）、松本泰道 副機構長、村里泰昭学長特別補佐、隈元貞広
地域連携推進会議委員（人社系）、尾原祐三 地域連携推進会議委員（自然系）、入江
徹美 地域連携推進会議委員（生命系）、都竹茂樹 政策創造研究教育センター教授、柳
瀬 寿マーケティング推進部長、北村敏夫 学生支援部長

議 題：

1. 成28年度プログラム修了者（案）について
2. 修了証の文言について

報 告：

1. 平成28年度COC評価結果について

表 11 平成27年度 地域創生推進機構運営委員会 委員名簿

所 属	役 職	氏 名
機構長	学 長	原田 信志
副機構長（研究・社会貢献担当）副学長	理 事	松本 泰道
学長が指名する理事・副学長 理事（教育・学生支援担当）	理 事	古島 幹雄
学長が指名する学長特別補佐 学長特別補佐（教育改革担当）	教 授	村里 泰昭
熊本大学地域連携会議委員 （人社系）	教 授	隈元 貞広
熊本大学地域連携会議委員 （自然科学系）	教 授	尾原 祐三
熊本大学地域連携会議委員 （生命科学系）	教 授	入江 徹美
政策創造研究教育センター （政策部門）	教 授	上野 眞也
政策創造研究教育センター （生涯学習部門）	教 授	都竹 茂樹
マーケティング推進部	部 長	柳瀬 寿
学生支援部	部 長	北村 敏夫

熊本大学 地域創生推進機構連絡協議会

日 時：平成28年7月29日（金） 13：30～15：00

場 所：本部棟1階 大会議室

出席者：松本泰道副機構長（議長）、

上野真也 教授、安部美和 特任助教（政策創造研究教育センター）

齋藤 靖 大学教育統括管理運営機構

山本國雄 熊本県企画振興部政策審議監、

古賀 実 水俣市水俣環境アカデミア所長（緒方克治 部長代理）、

金子正秀 天草市総合政策部部長、

坂口啓介 菊池市政策企画部長、

原田絵理咲 芦北町企画財政課参事（柳田豊彦 課長代理）、

福田 昭 熊本経済同友会事務局長

議 題：

1. 平成27年度 COC活動の事業報告について
2. 平成28年度 COC活動の事業計画について
3. 意見交換

表 12 平成27年度 地域創生推進機構連絡協議会 委員名簿

所属・役職	職 名	氏 名
熊本大学 研究・社会連携担当理事（副学長）		松本 泰道
熊本大学 政策創造研究教育センター （政策創造研究部門）	教 授	上野 真也
熊本大学 政策創造研究教育センター （生涯学習教育部門）	教 授	都竹 茂樹
熊本大学 大学教育統括管理運営機構	教 授	齋藤 靖
熊本大学 地域創生推進室	特任助教	安部 美和
熊本県企画振興部	政策審議監	山本 國雄
熊本市市長政策総室 政策企画課	総括審議員	村上 徹
水俣市総務企画部	部 長	緒方 克治
天草市総合政策部	部 長	金子 正秀
菊池市政策企画部	部 長	坂口 啓介
阿蘇市総務部	部 長	和田 一彦
芦北町企画財政課	課 長	柳田 豊彦
熊本経済同友会	事務局長	福田 昭

熊本大学 地域創生推進室会議

設置目的

本会議では主に、COC事業全体にかかる方針、文部科学省や学外団体・機関等との関係事項対応を審議する。

<第1回>

日 時：平成28年6月6日（月） 10:00～11:00

場 所：共用棟黒髪Ⅰ4F 政創研会議室

出席者：松本泰道 推進室長（議長）、上野眞也 教授、都竹茂樹 教授、本間里見 准教授、
田中尚人 准教授、富吉満之 COC特任准教授、安部美和 特任助教、
天野 慧 COC特任助教、内山 忠 COC特任助教

議 題：

1. 平成28年度地域創生推進機構連絡協議会について
2. 平成28年度地域創生推進機構運営委員会について
3. 平成28年度熊本大学地域創生推進機構外部有識者評価委員会について
4. 平成29年度以降の肥後熊本学について
5. その他

報 告：

1. プログラム認定について
2. その他

表 13 平成28年度 地域創生推進室会議 室員名簿

所属・役職	職 名	氏 名
研究・社会連携担当理事（副学長）		松本 泰道
政策創造研究教育センター（政策創造研究部門）	教 授	上野 眞也
政策創造研究教育センター （生涯学習教育部門）	教 授	都竹 茂樹
大学教育機能開発総合研究センター	准教授	本間 里見
政策創造研究教育センター	准教授	河村 洋子
政策創造研究教育センター	准教授	田中 尚人
政策創造研究教育センター	准教授	円山 琢也
政策創造研究教育センター	特任助教	安部 美和
政策創造研究教育センター	COC 特任助教	天野 慧
大学教育機能開発総合研究センター	COC 特任助教	内山 忠
政策創造研究教育センター・	COC 技術補佐員	福井 奈美

熊本大学外部有識者評価委員会

設置目的

本会議では、熊本大学及び地方自治体等が連携して取り組む文部科学省「地（知）の拠点整備事業」における地域志向の教育・研究・社会貢献の実施状況について、評価を行う。

日 時：平成28年7月27日（水） 10:00～12:00

場 所：本部棟2階 貴賓室

出席者：山本 國雄 熊本県企画振興部 政策審議監

山川 肖美 広島修道大学ひろしま未来協創センター センター長

幸田 亮一 熊本学園大学 学長

浜田 浩生 熊本日日新聞社 常務取締役

丸野 香代子 株式会社談 代表取締役

小野 友道 医療法人社団寿量会熊本機能病院 顧問（議長）

議 題：

1. 平成27年度COC事業報告について
2. 評価について

表 14 平成28年度 地域創生推進機外部有識者評価委員会 委員名簿

所 属	氏 名
熊本県企画振興部 政策審議監	山本 國雄
広島修道大学 ひろしま未来協創センター	山川 肖美
熊本学園大学 学 長	幸田 亮一
熊本日日新聞社 常務取締役	浜田 浩生
株式会社 談 代表取締役	丸野 香代子
医療法人社団 寿量会 熊本機能病院 顧問	小野 友道

熊本大学 COC 地(知)の拠点整備事業 | ハグクム

HugKum

活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成

平成 28 年度「地(知)の拠点整備事業」

活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成

熊本大学 COC 事業 - 事業報告書 -